磯長と檜隈

―7世紀の造陵墓地―（補記）

網干善教

飛鳥に都が営まれていた7世紀の時代を大化改新あたりで前・後に分けた場合、前半すなわち「飛鳥前期」は推古天皇を中心とする時代、これに対して「飛鳥後期」とする後半は何といっても壬申の乱に戦勝し、権力を掌握して、政治的には律令体制の確立へと向った天武天皇の時代であることはいうまでもない。換言すれば飛鳥時代の権力の中枢は前半は推古天皇を、後半は天武天皇を中心に展開していたということになる。

かつて、『横田健一先生還暦記念日本史論叢』に「七世紀における造陵墓地について」（昭和51年9月）と題して論考を試みたことがある。その要旨は文献上からみて飛鳥時代の天皇及び皇后、皇子、妃らの陵墓がどこに築造されたかを考え、その地が選ばれた政治的、社会的背景の意味を通じて、7世紀の歴史に対する認識と問題を整理してみようと意図したものであった。その結果、7世紀代の造陵墓地は磯長・押坂・近江と飛鳥の4地域に限定されることになり、系譜的にそれぞれの地域に造陵墓される天皇、されない天皇（例えば崇峻・孝徳天皇など）のあることを検討し、その理由を説明してみた。そうしたことにより、それらの地域での造陵墓の主導的権力をもったのは、磯長は推古天皇、押坂は舒明天皇、近江は天智天皇、飛鳥は天武天皇であると考えた。

考古学の研究、特に古墳時代に関心をもつ1人として磯長や飛鳥檜隈を訪れることが多い。特に飛鳥の地域は長年にわたるフィールドでもある。それにつけて思うことは、磯長の地域においては推古陵が最もすぐれた地形を選んで築造されており、飛鳥檜隈では天武陵が最高の立地を選択し、築陵されている。それは磯長や檜隈を廻ぐるとき、両者は一際、孤高を持するように感じることがある。

『記紀』によると磯長に陵墓を築造したのは石姫からはじまる。崇峻紀4年4月条の「葬譯語田天皇於磯長陵。是其妣皇后所葬之陵也」とあって、天皇陵としては敏達天皇にはじまる。いうまでもなく広姫の亡き後の敏達天皇の皇后は推古天皇である。すなわち先帝であり、夫であった敏達天皇を広瀬の殯宮から磯長に移したのは推古天皇ということになる。

その後、用明天皇、竹田皇子、聖徳太子、穴穂部間人皇女、膳夫娘、推古天皇らがこの磯長の地に築陵されている。これは系譜的に蘇我氏系の血統をひく一族がここを造陵墓地としているといえる。

このように考えてみた場合、問題があるのは天皇ではないが蘇我馬子の墓である。推古紀34年5月の条に「大臣薨。仍葬于桃原墓。」とある。この「桃原墓」を大和飛鳥に所在する石舞台古墳とする説がある。但し「桃原」に関しては雄略紀7年是歳の条に天皇が大伴大連守屋に詔し、東漢直掬に命じ新漢陶部高貴らを上桃原・下桃原・真神原の三所に遷居させたとある。この桃原が河内国の石川郡とする説と大和国の石川乃至は石舞台古墳を桃原墓と考えてその所在する辺りを桃原と考える説がある。私見では上桃原・下桃原と並んで真神原とあることや、馬子の薨去と桃原墓に葬る記事に続いて、馬子にかかわる記載のなかに飛鳥河の傍の家や嶋の

河内磯長の推古陵

池のことが記されているから、大和飛鳥地域と考え方がよいのではないかと思う。

そうすると馬子の墓を磯長に築かずに馬子の場合はその権力の中枢である飛鳥に築いたかということになる。これについてはやはり飛鳥との強い関係があると考える。例えば仏教受容にあたり向原の宅を寺と為したこと、飛鳥真神原に法興寺を建立したこと、そして推古紀34年5月の条の「家於飛鳥河之傍。乃庭中開小池。仍興小嶋於池中。故時人曰嶋大臣。」とあり、「嶋大臣」と称された池と嶋と桃原の結びつきがあり、馬子は飛鳥から離れることのできない事情があったと考える。同じことは欽明天皇の場合にいえる。推古紀20年2月の条の「改葬皇太夫人堅塩媛於檜隈大陵。」など蘇我系のなかで馬子と時の権力と結びついた一族は飛鳥と強いかかわりをもっていたと理解できよう。そうしたことが飛鳥とその周辺に築墓されることになった。

もう1人は崇峻天皇である。系譜的には磯長の地に葬られるべき天皇であるが、押坂に葬られている。これはいうまでもなく崇峻紀5年10月の条に「招聚儻者。謀弑天皇。」とあり、11月に「乃使東漢直駒。弑于天皇。是日、葬天皇于倉梯岡陵。」とある。

さらに逆の立場の1人は孝徳天皇である。この天皇は系譜的には蘇我氏ではないが、難波宮における中大兄皇子（天智）や大海人（天武）皇子らに反抗したことが知られる。そうすると押坂は天智・天武天皇の父の舒明天皇の陵墓地であるから結局磯長に帰結することになる。このように考えてみると磯長は飛鳥前期の蘇我氏系の天皇とその一族の造陵墓地で主導権を握っていたのは推古天皇ということになる。

一方、飛鳥檜隈はどうであろうか。いうまでもなく檜隈の地は飛鳥京、特に飛鳥浄御原宮の西方、若しくは西南方、藤原宮の南方の隣接地である。文献上から造陵墓は先述の欽明天皇・堅塩媛の合葬陵、吉備姫王、天武・持統天皇、文武天皇、さらに地域を拡大すれば草壁皇子陵や斉明天皇陵までふくまれる可能性がある。

この地区における7世紀代の築造と推定する古墳を挙げると岩屋山古墳、牽牛子塚、高松塚、マルコ山古墳、キトラ古墳、束明神古墳、中尾山古墳などが集中する。鬼の雪隠・俎も同じ1基である。菖蒲池古墳もふくめてよいだろう。

飛鳥檜隈の天武陵

ところで島宮を拠点として壬申の乱に勝利し飛鳥浄御原宮を造営した天武天皇はその西方隣接の檜隈に埋葬された。造陵は当時皇后であった鸕野讃良皇女、後の持統天皇である。持統天皇も火葬の後、檜隈大内陵に、佐田丘には草壁皇子が、文武天皇もまた火葬の後に檜隈安古岡陵に葬られた。但し、ここには「聖なるライン」も「聖なるゾーン」も存在しない。

天智天皇、天武天皇は系譜的には欽明天皇・石姫、敏達天皇・息長真手王の娘広姫、押坂彦人大兄皇子・糠手姫皇女（嶋皇祖母命）、舒明天皇・皇極（斉明）天皇、そして天智・天武天皇と続く。この血統は非蘇我氏系であり、それ故に蘇我宗家蝦夷・入鹿父子を誅して大化改新を断行し得たのであった。これによって蘇我氏の「嶋」の伝領は中大兄皇子側によって没収され、これが後に天武天皇に継承され、いわゆる「嶋宮」の基盤をなすものとなった。それ故に壬申の乱の拠点はここに置かれることになる。嶋宮はその後、奈良時代に至るまで重要な役割をもつことになる。持統天皇以後は文武・元明・元正天皇と蘇我倉山田石川麻呂の娘たちを母とする血統に継承される。こうした皇統と財力に支えられた飛鳥後期の陵墓はこの飛鳥檜隈の地に営まれた。

このように考えてみれば、飛鳥前期は蘇我馬子を権力を背景とした推古天皇の磯長であり、飛鳥後期の檜隈は非蘇我若しくは反蘇我宗家の息長、押坂系の天武天皇、そしてかつて蘇我宗家の粛清に加担した蘇我倉山田石川麻呂系の血統を引く持統、岡宮、文武天皇らの造陵墓であったことが考えられよう。